
夢想花

ことみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢想花

【Nコード】

N6705Y

【作者名】

ことみ

【あらすじ】

日本から宋の国にとばされ、国の重鎮のもとで生活していた神崎鈴音。ある日、彼女を訪ねてきた国の王太子の願いとは、彼女が正妃候補として王太子宮で暮らして欲しいというもので・・・！？

プロローグ

ここは宋の国。私の名前は神崎^{かんざき} 鈴音^{すずね} 18歳。日本の女子大生をしていた。専攻は幼児教育。いずれ幼稚園の先生になりたいと思っていたものだ。しかし、現実はそのではなく宋の国にトリップしてしまい困り果てていた私を、宋の国の重鎮である、李^り 斉蓮^{せいれん}様に保護され、養女にしてもらった。斉蓮様は優しく、温厚なお方で、本当の父のように思っている。

「鈴音様^{すずね}。旦那様^{だんなさま}が呼びにございます。ご足労いただけますでしょうか？」

「ええ、ありがとう、琉香^{るか}。それでは、支度をしなくちゃね。お願いできるかしら？」

かしこました、と琉香は私の支度をしていく。ここでは、養女の私でも当主である斉蓮様にお会いするには略式の服装にならなくてはいけない。私のお世話係は何人かの侍女がいるが、筆頭^{ひだり}は琉香だ。彼女は私と年も近く、いつも付き従う筆頭の侍女だ。今日もいつものごとく衣装を選び、丹念^{たんねん}に化粧を施し、琉香の先導のもといつものように、斉蓮様のお部屋へ向かう。よく話すことが多いけど、こんな朝早くからお呼びなんて珍しい。なにか、あつたのだろうか？

「琉香。朝早くのお呼び出しのこと、何か聞いている？」

「それは、旦那様自らご説明されるそうですわ。お早くいきましよう」

「わ、わかってます。まだ、衣装の裾が長いのに慣れないんだもの……」

略式の衣装といえど、上質の布が使われている。この国の女性なら

普段着なのだろうけど、私にしてみたら普段着からおしゃれに入るけどなあ。そうこうしてるうちに、斉蓮様のお部屋についた。先触れの琉香が、伺いのノックをする。内からどうぞ、と声がかかりゆつくりと扉が開かれる。眩しい光の中、斉蓮様と・・・もう一人、若い男・・・？

「失礼します。鈴音様をお連れ致しました」

「ご苦労、琉香。さがってくれ。あとでまた呼ぶから」

「承知いたしました。何かありましたら、お呼びくださいませ。失礼いたします」

そういったやり取りの後、琉香は下がり、部屋には斉蓮様と私と、若くて気品のある男の3人に。みるからに威厳のある顔立ちや雰囲気だけど、今までに見たことないけどなあ・・・？一応、淑女の礼をとり挨拶をする。

「お初にお目にかかります。李りせいれん 斉蓮が養女、鈴音すずね にございます。

本日はお越しいただき誠に恐縮でございます」

「いや、急にきたのはこちらの方だ。朝早くにすまないな、斉蓮、

鈴音」

「いいえ、我が君。行啓ぎょうけいいただき、感極まっております。本来なら、こちらから行かねばならぬところを・・・」

深々と我が君、と呼んだ方に臣下から君主にする最高礼をしてるのを見て、目の前の男が高貴なる身分であることがわかる。行啓、というのは王妃・王太后・王太子。王太子妃が外出することをいう。行幸ぎょうこうが王が外 出することをさすみたいだ。詳しくはわからないけれど。。

「鈴音。こちらのお方は、この国の王太子、緋ひしらん 紫蘭様。御年20

歳であらせられる。

御存じだね？」

「はい。もちろんにございます。それで、私がよばれたのにはどのような理由がございましょうか？」

「それは、私が申そう。鈴音、そなたに頼みたいことがある」

「頼みたいこと、にございますか……？」

やんごとなき身分の方が、重鎮の屋敷にきて、その養女に頼みごと……？ いったいどんな頼みごとなんだ。なんか、想像つくけど、なんか聞きたくないような……

「そうだ。そなたに、しばらく王太子宮で暮らしてもらいたいのだ」

「……聞いてもよろしゅうございますか？」

「堅苦しいのはよせ。そなたも、言葉遣いに慣れぬ様子。くだけた物言いでかまわん」

なんでわかった、と言いたいが相手は偉い身分の人。くわえて、養父は国の重鎮で私を保護してくれた人。くだけていっていつてくれてるんだ、それでいいじゃないか。

「では、失礼して。どうして、そんな大事なことを私に？ もっと、ふさわしい人とかいないんですか？」

「頼みたくとも、腹のわからぬやつばかりでな。斉蓮が保護している女性がいるときいて、人柄などを日々聞くうちに、そなたならと判断した。国の重鎮たる斉蓮の養女たる鈴音に、王太子宮で暮らしてもらう。もちろん、正妃候補としてだ。よろしく頼む」

よろしく頼む、って拒否権は……ないわよねー。あつたら、こんな朝早くからよばれないはずだ。仕方ない、斉蓮様に迷惑はかけれない。暮らすだけならいいわよ、暮らすだけなら。候補なら、あ

とで理由つけて帰れるだろうし。そう思っていた私の考えが大きくくつがえ覆されるとはこのときは思いもしなかった。

プロローグ（後書き）

初書きです。応援よろしくお願いします

1・王太子宮へ

先日、宋の国の王太子である 緋ひしらん 紫蘭様がこられて正妃候補としてあがつてほしいといわれて紫蘭が帰ると、すぐに家令の 江來しやうらいを始め、使用人たちが主である李り 齊蓮せいれんの名に恥じぬよう、とぬかりなく輿入れの準備をしていく。他に何か言われるようなことがあつてはならない。慌ただしく数日がすぎ、輿入れの日となった。

「鈴音様すずね、本日のめでたき日を迎えられましたこと、我ら心よりお祝い申し上げます」

「ありがとうございます。皆さんも、短い間ですが、お世話になりました」

「ありがたきお言葉、しかと頂戴いたしました。琉香るかをお連れください。王太子宮へそば仕えの者をひとり連れてよいと、お達しがありましたので」

琉香が前に進み出て嬉しそうに微笑む。よかった、彼女にはついてきてもらえたらと思っていたし。見ず知らずの世界で、親しいといえるのは養父である齊蓮と琉香だけなのだ。婚礼の行列は厳かに、王太子宮へと出発したのだった。長い行列にほう、とため息がもれる。

（日本の花嫁行列みたい・・・おばあちゃんが、言ってたつけ。すごく長い列だったんだって）

鈴音はそんなことを聞いているだけで見たわけではない。しかし、それを彷彿ほうふつとさせるものが、婚礼の行列にはあった。流れゆく景色の中で、前方にひとときわ大きい建物が見えてきた。きっと、あれが王宮なんだろう。

「もうすぐですよ、鈴音様。つく頃には紫蘭様とお会いできると思いますわ」

「そうね。・・・にしても、この花嫁衣裳、派手すぎないかしら？こんなもの？」

「ええ。紅の衣装はお気に召しませんか？よくお似合いですよ。ああ、降りるときには裾を私が後ろよりたくし上げますから、ご安心くださいませ」

につこりと微笑まれて、う、と言葉につまってしまふ。元々、おとなしい性格の鈴音だ。やさしく言われるといやとは言えない。そうこうしているうちに、行列は王太子宮へとついたようだ。鈴音たちが乗る軒がゆつくりと、止まる。落ち着いてそうつと降りる。後ろはまかせて大丈夫だ。

「ようこそ、鈴音様。我ら一同、今日この日を心よりお祝い申し上げます」

一糸乱れぬ呼吸で王太子宮へ仕える者たちが跪く。最高礼をもって迎えられた。緊張のあまり言葉につまりそうになるが、口上をのべる。

「ありがとうございます。今日よりお世話になる李　鈴音にございます。よろしく」

「鈴音！来たか、待ちわびていたぞ！」
「きゃっ」

体が軽くなった、と思ったら突然現れた紫蘭に抱きあげられていた。正装に包まれた紫蘭はいつもより色気があり、はにかんだ笑顔に一瞬、どきつとした。顔に朱がはしるのがわかる。

「び、びつくりするじゃありませんか、紫蘭様」

「紫蘭でいい。私たちはこれから毎日、顔をあわせるのだから。あ、今までお前という存在を知らずにいた日々はなんともつたいないことか。だが、今日からは違う。私は鈴音という至宝を手に入れたのだから」

「し、紫蘭様……」

「紫蘭でいいと、いつておろう」

ちいさく、紫蘭、とつぶやくと彼はそうだ、と頷いた。今までこのような過剰にスキンシップや言葉をかけられたことがないのに、これがいざらう続くのだろうか。嬉しいようななんとも複雑な気持ちになった。

2・紫蘭との再会

紫蘭との再会の後、まずはお茶をとということになり、鈴音がこれから住む部屋に案内される。部屋につくまでの間、鈴音はずっと紫蘭の腕の中にいた。・・・正確には、いるように言われた、だが。おろして欲しい、というところのままでよい、と返事が返ってくるため二度ほどそのやり取りをした後、諦めたのだった。

「ここが今日から鈴音が生活する部屋だ。気に入ったか？」

「わあ・・・すごい！！ここで今日から生活するのね。ありがとう、紫蘭」

「なに、このくらいのこと。そなたの輝く笑顔を見るためなら、できることなんでもしてやる」

緋色の瞳が柔らかく細められ、愛しげに見つめられて、あわてて俯く。頬に熱が集まるのがわかる。そんな風に熱い視線をおくられたら、どう返していいのかわからない。頬に両手をあてながら、鼓動が静まるのを待つ。

「もう。そんなこと言って、私が無理なこといったらどうするつもりなの？」

「叶えられるなら、叶える。だが、鈴音はそんな女性ではないと、わかってる」

「あ、ありがとう・・・」

嬉しい。斉蓮から聞いているとはいえ、そこまで信頼してくれるとは。そこへ、今まで控えていた琉香が、花茶を持ってきた。花茶はもてなしのお茶で有名である。お茶の中で、少しずつ花が茶の中で開いていくのが有名だ。

「これが、花茶なのね。．．．うん、おいしいわ。これは、紫蘭が手配してくれたのかしら？」

「ああ。そなたを歓迎する、ということを知ってもらいたくて花茶でいい表せるわけではないが。改めて、李 齊蓮が養女、鈴音。そなたを正妃候補として、心より歓迎しよう」

紫蘭は鈴音を見つめながら、艶然と微笑んだ。心臓が跳ねたのがわかる。紫蘭の微笑みは心臓に悪い、と思う。そんなこといったら、何が待ってるかわからないから、いつてあげない。でも、彼の笑顔を近くでみれるのは、今私だけ．．．この幸せが長く続きますように。

2・紫蘭との再会（後書き）

王太子宮編にはいります。齊蓮様、いつ再登場にしようか。頑張ります！

3・憩いするとき

2人きりで落ち着いたところで、王と王妃に挨拶しにいかなくてはいけない、と紫蘭に言われた。今日は疲れているため、明日の朝とのことだった。未だかつてない経験に、会ってもいないのに、緊張してしまう。それをみてとった、紫蘭が意外な行動に出た。

「なにを思いふけている？今、目の前には私がいるというに、他の者のことを考えているだろう？・・・面白くない」

「！だ、だからって、いきなり抱きしめて、ほおにキスはびっくりするよ。し、しちゃだめってことじゃなくて」

「私は、明日の謁見のことについて、考えてただけなのに・・・」

「そう気追うな。自然体の鈴音が、父王達も喜ばれる。そうだ、先にいっておくことがある。謁見で私の弟にあうことにもなるからな」

「弟・・・第2王子様？」

「そうだ。遙翔つぎしぎ という。今年11歳となったところだ。今年1歳となったところだ。まだやんちゃでな、こちらでも少し手を焼くところだ」

仕方のないやつだ、と笑む彼の顔は親しいものだけにみせるもので、いかに遙翔王子を愛しているかが、わかるものだった。一体どんな王子なのか。私とは打ち解けてくれるのか。その時、紫蘭が席をたったので、服の裾をひいて引きとめた。

「どうしたの、紫蘭？どこかへ行くの？」

「ああ、すまない。これから、残っている仕事をせねばならん。王太子としての務めだ。そなたを正式な正妃とするための手続きも入っている。が、こちらにも少々難題があつてな・・・」

「難題？・・・ってなに？」

「手を焼く相手が一人いてな。相手の家柄が高い分、うかつな行動もできかねるし。知っておくべき権利があるから、教えておく。斉蓮と並び称する家格の家の、娘がいる。　ゆうさな 侑 紗南という。年は15歳。近いうちに、あわせることになるだろう。そのため、候補という形をとったのだ。・・・すまないな。すぐに戻る。夕食は共にしよう。それまで、くつろいでいてくれ」

そういうと、憂いを含んだ目で鈴音をみつめ、そばまでくると抱きしめ、ぽんぽん、と幼子をあやすように頭をかるくたたいてから、紫蘭は仕事へと向かっていった。

「・・・ライバル登場、ってことになるのよね？その子と争うってこと？まだ私、陛下や王妃様にお会いもしていないのに。大丈夫かなあ。ううん、紫蘭を信じよう。大丈夫よ、きっと」

うんうん、と納得して鈴音は紫蘭が帰るまでの時間つぶしを、どうしようかと思い悩んだ。

3・憩いするとき（後書き）

候補とした形の理由を書いてみました。これから大変そうです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6705y/>

夢想花

2011年11月22日14時30分発行